伝法堂

東院にあるこの講堂は元々、聖武天皇（701–756）の后の一人である橘古那可智の家であった。後に彼女はそれを法隆寺東院に寄付した。仏教の講堂として改造され、7x4 の格間、立ち並ぶ柱、瓦の屋根がありました。法隆寺の多くの建物と同様に、その頑丈な構造と、二重になった虹の形をした梁を支える天井のカエルの足の形をした支柱が棟木を受ける構造は奈良時代の建築の典型で、建築家を魅了している。歴史家はそれを日本の奈良時代における住宅建築の唯一の資料とみなしている。堂内には、四天王像にかこまれた阿弥陀如来など奈良時代（710〜794）と平安時代（794〜1185）につくられた約 20 の像がある。宗教的な伝承では、阿弥陀は慈悲と思いやりを示唆し、その穏やかな視線は信者によって尊敬される無限の光の仏である。堂内はめったに訪問者に開かれていない。